

金融システム研究フォーラム 概要

第 49 回 2011.12.16 (金)

今回は、三輪が 11 月末に完成した「“Bubble” or “Boom”?」: 『法人企業統計年報』個表を通じた、『失われた 20 年』研究準備のための 1980 年代後半期日本経済の検討」と題する DP(CIRJE-J-238, CARF-J-078)について報告し、討議した。200 ページを超え、300 以上の図表を含む長大な論文であり、表題に示唆する如く、構成も複雑である。このため、報告用資料の(1)に示す部分を中心に報告し、(2)の部分については簡単に覗くのみにした。

1980 年代後半の日本経済については、その直後から「バブルの時代」と呼ぶのが慣例となり、投資行動を中心とする企業・家計の行動を「バブル的」と批判・非難することに性急で、実相を正視してこなかった。本格的研究の対象となることもほとんどなかった。続く「失われた 20 年」と呼ばれる長期停滞の時代についても、「バブル」の後遺症・ツケと診断し、それに基づく処方を採用し続けてきた。日本経済停滞の継続はこの処方の不徹底、規模の小ささによるとする主張にも強い支持がある。／ この「通念」の大前提に根本的疑問を提示し、詳細な検討を通じて、「バブルの時代」だとする判定および「バブル」という表現の呪縛から読者を解放することが本論文の第 1 の目的である。さらに、大幅な地価変動との関連で企業の土地関連投資行動に過大な関心を向けがちな「バブルの時代」に替えて、「設備投資ブームの時代」と位置づけることにより、より多くの企業が積極的行動を示した「土地以外の固定資産」に向けた投資行動の実態への読者の関心の移行を促すこと、これによりこの時期の日本経済の実相の的確・適切な検討を可能にすることがより重要な第 2 の目的である。

以上の部分について紹介し、次のような結論に至る（いずれも、「要旨」より）。

三輪[2011c]「『不良債権』『不良債権処理の遅れ』『追い貸し』と『失われた 20 年』: 日本の経験からの教訓?」『経済学論集』第 77 巻第 2 号、第 3 号、ただし、後半部分は現在印刷中) および本論文で、いずれの主張についても、fuzzy but colorful な用語を用いたほとんど意味不明な内容であり、論拠・証拠の双方が理解不能あるいは実質的に存在しないこと、および「通説」「通念」が現実からはなはだしく乖離した神話にすぎないことを示した。これにより、「バブルの時代」だとする呼び方、「バブル的」だとする「色メガネ」から 1980 年代後半の日本経済を解放することが可能となり、実相に関する本格的検討の開始が可能となる。「結語」はたとえば次の如く記す。

「失われた 20 年」は、「バブル」、「バブルの時代」、「バブルの後遺症・ツケ」などの表

現・イメージに象徴される「バブル論議」に酔い痴れて、人々が時間とエネルギーを浪費し、日本経済を悪化した長期停滞状態のまま放置した時代であった。本論文の基本的役割・位置づけは、日本経済に関わる研究・議論、診断・処方にかかる憂うべき現状からの覚醒・脱出とそれによる「バブル」の呪縛からの解放である。これにより、1990年代以降の日本経済の停滞状況の原因を「バブル（の時代）」に求めてきた「通説」「通念」の基本姿勢からも解放され、「失われた20年」の診断の本格的開始のための条件が整ったことが重要である。

「『失われた20年』研究準備のための検討」である旨を記した「XIV. 結語」に続いて、「『検討』はより若い次の世代の皆さんの楽しみです・・・」と宣言して報告を終えた。同年輩の出席者から「長大な三輪さんの遺言ですね・・・」と笑顔で同意する発言があり、若い世代のメンバーからは、「三輪先生がおやりになる・・・というのではないのですか？」「面白い問題提起だと思いますが、私ももう若くはありませんし・・・」「遺言だなんて、ずるい・・・」などの意見があった。個表データを用いた詳細な検討を通じて次々と提示される意外で面白い結果をめぐって活発な議論が続いた。

「『バブル』とか『バブルの後遺症・ツケ』と騒いだ人たちからの反論が楽しみです」とする意見も、「反論はないでしょう。これまでだって証拠なしの説教みたいなものだったし・・・」とする三輪の予測で簡単に終息した。

ショッキングな内容の複雑な構成の議論に辛抱強くつきあい、分厚く重い DP をお持ち帰りいただいた参加者に深謝します。